

第IV部門

近代における淡河疏水開発の歴史的意義に関する研究

近畿大学理工学部 社会環境工学科 学生員 田原 学
 近畿大学理工学部 社会環境工学科 正会員 岡田 昌彰

1. 研究の背景と目的

2005 年に御坂サイフォンが土木学会選奨土木遺産に認定された。いっぽう、淡河疏水施設の 1 つであるこの構造物において技術面の検討はされているが、開発背景については具体的な検討は行われておらず、既存文献においても、政府の疏水開発意図に関する記述は存在していない。本研究において淡河疏水および播州葡萄園の一次史料を手がかりとし、同疏水と葡萄園整備との関連を検討することにより、疏水開発において新しい歴史的意義を明らかにすることを目的とする。

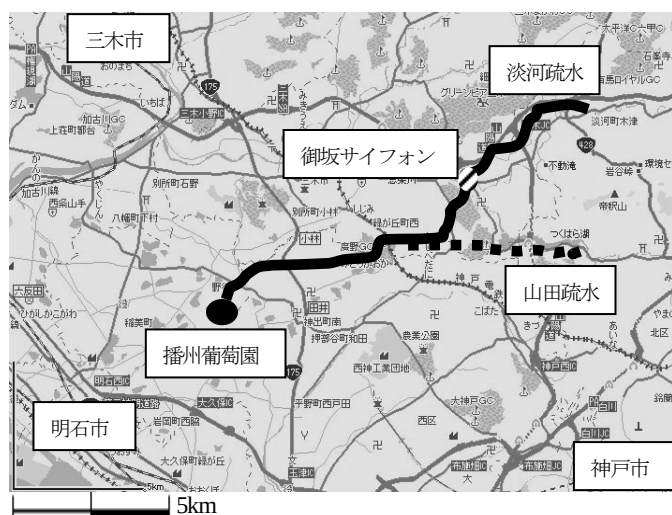


図-1 淡河疏水および播州葡萄園の位置図

2. 殖産興業の下で開設された三田育種場

明治政府が展開する殖産興業政策の下での内務省における勸業政策は、官が産業において実例を全国へ向けて示し、その成果を全国に普及させる狙いがある“模範政策”の導入を含んでいたが、農業においてもその影響を受け、同省勸農局が内藤新宿試験場や東京・三田育種場を設置した。後に大蔵省大書記官となる前田正名によって東京に開設されたこの育種場においては、茶をはじめとする国産優良作物、外国から輸入した果実、及び輸出用作物などが栽培されている。前田による“開園挨拶”の中では、同育種場の性格が輸出を意識したものであることが窺え、また同園では西洋農具の交換市も行われたことから、西洋農業伝播の拠点とされていたことがわかる。

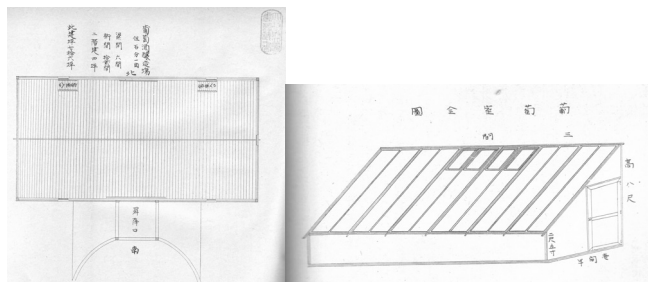
3. 播州葡萄園の開園

その後、初代内務卿の大久保利通を中心として「模範政策」が展開され、その一環として三田育種場に葡萄が持ち込まれた。その理由としては、葡萄栽培が国内に根付き国産ワインが醸造出来れば、当時輸入超過となっていた輸入ワインの抑制、あるいは清酒の原料でありながらも当時不足していた“米の節約”があったとされている。この背景には、大久保によって提起されていた直輸出構想にみられるように“外貨獲得”が重視されていたことがあった。

しかし、三田育種場における葡萄栽培は寒冷な気候という欠点にも悩まされ、1879 年に明治の園芸家である福羽逸人によって“栽培不可”と報告されるに至る。これによって適栽地は西日本に求められ、その結果兵庫県加古郡印南新村が選定され、1880 年に国営の“播州葡萄園”が開設されるに至る。同園においても、葡萄栽培や国産ワインの醸造の実例を示すことが主目的とされ、葡萄の栽培方法や品種の検討、ワイン醸造の研究などが行われ、ここで開発された葡萄の苗は各地へ配布もされていた。

同園に対する政府の注目度の高さは、同園への政府関係者の視察状況(表-1)や、醸造場(図-2)の園路とされた畑と醸造場を結ぶ“馬車道”(図-3・4)、ガラス温室(図-2)、葡萄畑の排水を目的とした暗渠の構築に対する明治政府の本格的な設備投資などから窺える。また、葡萄の栽培方法と同様、多くの設備自体はフランスの手法を模範としていた。そして生産能力が向上すると共に、醸造場やガラス温室の増築が行われ、ワインの増産は積極的に促進されていく。

開園当初は経営状況が順調であったが、1885 年に生じた園内に害虫であるフィロキセラの発生により莫大な被害を受けた。また 1881 年に大蔵卿の松方正義を中心として政変が起こり、

図-2 醸造場平面図及びガラス温室のイメージ図⁴⁾

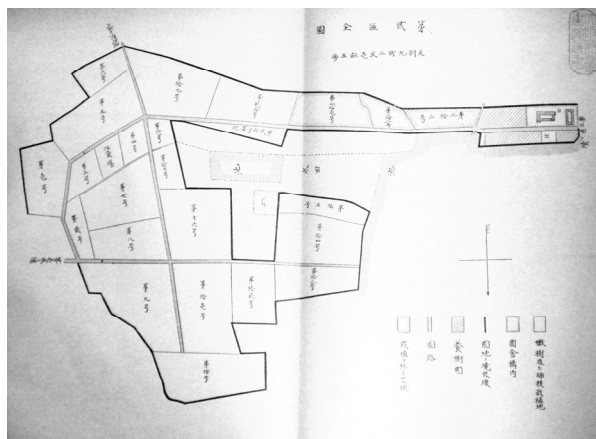
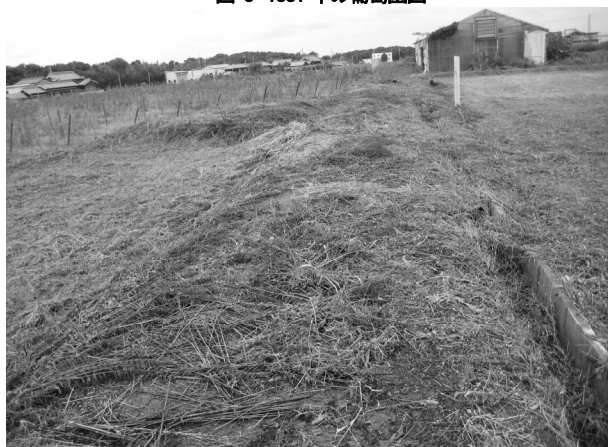
図-3 1881年の葡萄園図⁴⁾

図-4 現在の馬車道跡（筆者撮影）

表-1 播州葡萄園の経過と政府関係者の視察状況

1877	三田育種場開設
1880	国営播州葡萄園、印南新村で開園
1881	内務省大書記官田中芳男が葡萄園視察
1882	農商務省大輔品川弥次郎が葡萄園視察
1883	播州葡萄園、農務局の直属機関となる
	大蔵卿松方正義、収穫直前の葡萄園視察
	西郷従道農商務卿、葡萄園視察
	園内に50坪の灌漑用ため池築造
1886	前田正名に播州葡萄園と神戸オリーブ園の経営委託
1888	葡萄園にて淡河疏水の起工式が行われる
	淡河疏水工事開始
	前田正名に播州葡萄園と神戸オリーブ園を払い下げ
	多木久米次郎、前田正名の委託により葡萄園の経営に携わる
1890	登録商標「播州葡萄園」登録
1893	葡萄園池増築
1895	多木久米次郎に園内のアカシヤの木売却
1896	経営困難に陥り、廃園同様に

軍事産業の拡充を図った松方によって官営事業の民間払い下げが進められ、同園は1888年に前田正名に払い下げられた。また、前田が同年山梨県知事に任命され現地を離れたことから、払い下げ後の同園の経営は国内で初めて人造肥料を開発した多木久米次郎らに委託されるが、天災や地価高騰、葡萄の収益性の低下によって経営が悪化し、廃園に至る。

4. 淡河疏水開発

播州葡萄園が開設された兵庫県加古郡印南地方は元来、水利が悪く、旱魃による農作物への被害が多い地方であった。江戸時代から姫路藩によって奨励され主産業となっていた綿作が、明治に入り神戸港の開港と同時に輸入された安価な外国産綿に押されたこと、また地租改正による不当地租の苦しみから地元住民を中心に疏水懇願運動が盛んとなる。この地元住民の窮状に加え、政府の動きとしては当時葡萄園にて猛威をふるっていたフィロキセラの駆虫法として、フランスにおいて当時の最良の駆虫法として「灌水法」が導入されており、播州葡萄園もこれに倣い導入が検討された。そのため水が必要となり疏水事業の必要性が検討され、また官営事業の払い下げが進む松方財政下において、松方が同園の開設を推した1人であったことなどから、同園の害虫被害からの救済が図られた。結果として資金難で実施が困難となっていた山田疏水事業を、疏水路の変更により淡河疏水事業へと変更し、国庫貸付金の許可が下った。特筆すべきは、1888年に播州葡萄園にて淡河疏水事業の起工式が行われていることであり、ここに播州葡萄園と淡河疏水との明確な関係が指摘できる。同疏水事業では、英国人技師パーマーの計画の下、当時において画期的なサイフォン工が導入され、3年に渡る工事の末1991年に開通し、当地域に豊かな水利をもたらしている。

5. 結語

本研究では、淡河疏水や播州葡萄園に関連する文献を収集し、事実関係の明確化によって淡河疏水事業と播州葡萄園との関連を示し、淡河疏水が播州葡萄園の支援を主目的の1つとして整備されたというという新たな史実を導き出した。これはいわば明治期の外貨獲得を含めた近代国家建設における壮大な「計画遺産」と位置づけられるものであり、御坂サイフォンや馬車道跡といった有形物と同等に土木史的価値づけが行われるべきである。

（補注）

淡河疏水と山田疏水の総称として「淡山疏水」という呼称がある。

【参考文献】

- 1) 兵庫県淡河川山田川疏水百年史：淡山百周年記念史編集委員会 1990
- 2) 稲美町史：稲美町 1982
- 3) 果樹栽培全書 第四：博文館 1896
- 4) 農務顛末第六巻：農林省 1957